

コロナ禍における国試対策への取り組み

徳田 律子^{*1}

1. 緒言

保健福祉学科では、社会福祉士・精神保健福祉士・介護福祉士の3つの国家資格の養成をおこなっているが、本稿ではその中でも最難関である社会福祉士国家資格について、本学科でのこれまでの取り組みとコロナ禍における国試対策の課題を整理していく。

社会福祉士は国家資格の中でも、難関資格と言われている。それは、第一に出題範囲が広い点、第二に合格率が低い点にあると考える。1つ目の出題範囲については、18科目から構成されているが、その内容は福祉・社会保障に関わる制度・政策はもとより、医学・心理学・社会学・司法・統計解析・経営など多岐にわたる知識が問われる内容となっている。このように試験範囲が広いため、勉強の取り掛かりが難しいことに加え、本試験では毎年のように見慣れない用語や内容に関する出題があり、難易度が高くなりつつある。国試合格のためには、過去問対策が重要であることは間違いないが、これまでとは異なる視点からの出題が続くなど、過去問対策だけでは合格が出来る試験ではなくなっている傾向にある。

さらに、合格率について言えば、国試の合格基準は、総得点150点に対し、得点90点以上の者(総得点の60%程度を基準とし、問題の難易度で補正)であり、なおかつ18科目群、すべてにおいて得点があった者、とされている。すなわち、全ての科目において0点科目がないとい

うことが条件となっているため、得点しやすい分野に絞って勉強することができず、合格がさらに難しくなっている。さらに、実際の合格基準点をみると、これまでは90点越えをしていれば合格圏内であったが、第31回以降の試験に関しては90点+aでも不合格となり、第34回試験ではついに105点以上が合格ラインとされた(表1)。これは実に総得点の70%に相当する得点率を意味している。試験問題が簡単であれば合格に必要なボーダーラインは高くなり、反対に難しくければ低くなるのは必然であるが、ここ数年は試験問題の難易度は大きく変動していないにもかかわらず、合格基準は上昇傾向にあり、得意・不得意科目をなくしつつ、バランスよくかなりの高得点を獲得することが求められている難試験である。

2. 2022年度の国試対策への取り組み

前述したように非常に難しい試験内容であるため、単に指定科目の履修だけでは相当な学力があったとしても合格は厳しい状況にある。合格のためには国試対策は必須であるため、本学科では、3年次からの意識付けに始まり、4年次から本格的に国試対策を始めている。特に、国試対策講座への参加を任意としないため、4年次には専門研究Ⅰ～Ⅲとして科目設定をしている。これは、国試対策が最終的な成績評価を伴うものとして意欲をもって取り組んでもらうとともに、学生の学習時間を確保する狙いがある。

*1 東北文化学園大学 医療福祉学部保健福祉学科

る。

国試対策としては、3年次から模試を複数回受けてもらい、国試の難易度を体感してもらうことで国試の勉強への動機づけとしている。本格的に4年次から始まる国試対策としては、前期が遠隔による基礎学習講座、後期がグループワークによる理解力の強化となる。また、月に1回程度は模擬試験を実施し、学修の成果が確認できる実践力を強化している。特に効果があるのは、合宿であり、これにより学生の学習姿勢に変化がみられる。これらはすべて国試対策委員会が中心となり、企画・実施している（表2に示す）。

3. コロナウイルス感染拡大による影響と課題

2019年末よりコロナウイルス感染拡大という

状況が続き、医療・経済・文化といった様々な面に影響を及ぼしている。当然のことながら、コロナウイルス感染拡大は教育にも大きく影響を及ぼしてきた。2020年度前期には対面授業が全面的に中止となり、グループワークによる学習会や合宿など国試対策が感染拡大防止の観点から見合わせられることになった。遠隔での授業運営は難しさもある反面、遠隔による課題の提出、学生の学修状況の把握・到達点の確認、就活などで対策講座に欠席した学生への補習、各種情報の周知徹底など、きめ細かい対応においてはGoogleClassroomの活用が国試対策として有用なツールとして活用したことは先に報告した¹⁾。

しかしながら、こうした遠隔における学習だけでは、前述してきたような難関国家資格をクリアすることは難しい。それは、国試の合格率

表1 社会福祉士国家試験 過去5年間の合格率と合格基準の推移

	第30回	第31回	第32回	第33回	第34回
点数	99点	89点	88点	93点	105点
全国合格率	30.2%	28.9%	29.3%	29.3%	31.1%

表2 2022年度 本学科における国試対策講座の取り組みの一例

○前期対策講座	前期の対策講座は、ソーシャルワーク実習および精神保健福祉援助実習の期間中であることに加え、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、遠隔での対応が中心となった → オリエンテーション（遠隔） → 対策講座の開催・遠隔・週2回/1-2時限目
○集中対策講座	新型コロナウイルス感染拡大状況を踏まえて、合宿形式を中止し、学内で集中講座を開設し、基礎学習講座に加えて、過去問・模擬問題を活用したグループワークによる学習を取り入れた。
○後期対策講座	集中対策講座を踏襲し、後期対策講座でも基礎学習時間に加えて、過去問・模擬問題を活用したグループワークによる学習を取り入れた。 →後期オリエンテーション →対策講座の開催・週2回 グループワークによる学習会
○模擬試験の実施	社会福祉士・精神保健福祉士・介護福祉士とも学内模試を8月から12月まで月1回程度のペースで実施した。

表3 社会福祉士国家試験 過去5年間の受験者数と合格者数の推移

年度	2018年	2019年	2020年	2021年	2022年
受験者数	43,937	41,639	36,629	35,287	34,563
合格者数	13,288	12,456	11,612	10,333	10,742

が30%、すなわち全国で福祉を学んだ3割の受験者にしか資格が与えられないという状況があるからである。国試の受験者数の推移(表3)をみると、2018年度の受験者をピークとしてコロナ禍では受験者数が徐々に減少傾向にあることが伺える。これはコロナの感染のリスクを避けるため、いわゆる記念受験組といわれる層が受験を控えたことが一因として考えられる。そうした中で国試受験に向けて集中的に勉強した層が受験をしたことにより、試験問題の質は変化しないまま、上位3割の合格という難易度調整により合格点は上昇の一途をたどっている。こうした状況を踏まえると、国試の勉強は、ますます集中的でテクニカルな対策へとシフトせざるを得ない状況にあると言える。

その中で、国試対策の組み立て方として重要と思われることを列挙するとすれば、第一には、国試は主体的な学習姿勢が重要である。国試は教員が一方的に教授するという形態ではあまり効果がないことは明らかである。特にコロナ禍

においては、遠隔での授業など在宅での自主学習時間が多くなりがちになるため、学生自身がモチベーションを保つことが重要である。加えて、国試という暗記中心の学習においては、学習内容のインプットとアウトプットのバランスを図る必要がある。そうした意味においても、学生同士の学びあい、グループワークによる学習会は国試の学習に効果的であり、コロナ禍における状況をふまえつつも、こうした学習をさらに拡充していくことが課題である。

本稿は、医療福祉教育研究会2021年度学術集会にて報告した抄録を元に加筆修正したものである。

【参考文献】

- 1) 豊田正利, 犬塚剛, 他. 現場レポート: 新型コロナウイルス禍での保健福祉学科の取り組み. 保健福祉学研究 2021;19:p63-69.